有限性の方へ

第二回　さまざまな近代二分論

加藤典洋

5 『ゆたかな社会』vs.『沈黙の春』

いま自分たちが新しい局面に入ったのかもしれないという私の判断は正しいのだろうか。

根拠があるとしたらそれは、どのようなことか。

むろんそれは三・一一の原発事故によって世界の新しい地平が開かれたというようなことではない。そうではなく、見方の上で、また考え方の上で、私のなかに一つの更新が生じた、ということである。その私の考えによるなら、これまでさまざまな形で別個に、外発的にいわれてきた新しい人間の問題が、ようやく互いに関連づけられ、一つの問いの形をなして、外部の社会の問題としてではなく人間の思想の問題として現れてきたということである。

その問いとは、有限の世界のなかで、人はどのように生きるべきか、というものである。

有限？　そのようなことなら、もうずいぶんと前から耳にしている、といわれるかもしれない。もう耳にタコができるほどだと。でも、これまで人は、もう半世紀も前から地球が有限であること、このまま何もしなければ世界が崩壊の危機に瀕すること、そのためどのようにかしなければならないことはいってきたが、生きることの前提と条件が変わると、どのような「生」の問題にぶつかるか、というようには問わなかった。

また、社会が新たな様相を示し、そこで「生」の条件がこれまでとは異なる困難とふたしかさのなかに置かれるようになり、生きることがこれまでとは別種の経験となりつつあるということも、半世紀以上も前からさまざまに指摘されてきたが、そのことが地球の有限性と結びつけられ、統合された視野のもとに、人の生き方まで届く射程をもって考えられるということは、ほんの十数年前まで、ついぞなかったのである。

その十数年前の統合の意味から、ここでは話を進めたい。しかし先に断っておくと、そこに提示された展望と理論をもってしても、まだ最終的な問いの形にまではたどりつかない。その先まで考える手がかりは別にそれとは離れた場所で語られていたが、そのことに気づき、右の問いがいま私たちの前にさしだされている課題の最深の形なのではないかと思いあたるのに、私の場合を例としていうと、前回述べたような経緯をもつ、三・一一からの示唆、未来的な指標の浮上が必要だったのである。

ここで手がかりにしたいのは、近代二分論という考え方である。聞きなれない言葉かもしれないが、いま私たちが生きる社会を従来の近代と異なる第二の近代ととらえ、近代を二分することで新しい社会の意味を取りだそうという思考枠組みのことを、こう呼んでいる。

つまりはこう考えてみるのだ。前世紀なかば、二つの世界戦争をへて産業革命以来の近代産業社会が大きくこれまでのあり方から離脱する兆しを見せる。すると、まず米国で、ついでヨーロッパで、社会の変化と変質を手がかりに新しい社会の様相、そこに出てくる異質な問題、そこでの生き方の指標等について考えるいくつもの「新しい近代社会」論が現れてくる。米国の新社会論、フランスのポストモダン思想、地球の環境や資源、人口の問題に警鐘をならす「成長の限界」の論、エコロジーをめぐる新社会論、持続可能性の運動など。これらは従来、別個の流れのうちにとらえられてきたのだが、本当は相互に関係しあうものとして考えられるべきだったのではないだろうか。なぜならそれらの出現をうながした社会の変化はほんらい「一体のもの」だったからだ。にもかかわらずこれらが別個に考えられてきたために、そこに生まれていた問題、この一体の変化から取り出されるべき問題が、見えていなかったのではないだろうか、と。

私の考えからは、それらの近代二分論は、大きく開放系の近代二分論と閉塞系の近代二分論とに分けられる。開放系とはこの近代は無限に続くと無意識のうちに前提にされた近代観のことであり、閉塞系とはこのまま行くと近代はなんらかの壁にぶつかるゾと意識化を促す近代観のことである。この二つは、互いに別個に、近代の新しい様相とそこから出てくる問題について論じ、考えてきた。しかし、この二つが合体し、一つになると、どのような問題領域が現れるのか。まず右の問いを、このような形で考えておきたいのである。

開放系の近代二分論から見てみよう。

こちらは、はじめ米国で、主に社会学と経済学の領域で姿を見せてくる。ときは、おもに一九五〇年代から六〇年代にかけてのこと。一九五〇年にデイヴィッド・リースマンが『孤独な群衆』を書いてこれまで注目されてこなかった世論調査で「わからない」と答える人々に焦点をあてるようになる。背景にあるのは人間の社会活動の重点領域がかつての「生産と開発」から「消費と人間関係」へと移ってきたこと。リースマンを動かしているのは社会が大きく変容しているという観察である。彼はそこで人々の人格形成が「伝統志向から内部志向をへて他人志向」へと変わってきているのではないかという見取り図を示す。そして新しい質の大衆社会の到来を予告する。ついで、五八年に経済学者のジョン・ガルブレイスが『ゆたかな社会』を発表し、社会が貧困からの離脱をとげ、経済学でこれまでは部分的な現象としてしかみなされることのなかった「ゆたかさ」が持続的に存続する新しい社会が現れてきたと述べる。そして、「ゆたかさ」を基調とする新しい消費社会の輪郭を示し、これに対応する経済学のアプローチが必要であると説く。さらにダニエル・ベルが、六〇年になると『イデオロギーの終焉』を刊行して米国にお

ける五〇年代の左右対決型の政治思想の枠組みの終焉を宣言し、七三年には『脱工業社会の到来』を著してこれまでとまったく違う知識情報社会の概要と条件を輪郭づける。また、これより先、六二年にはダニエル・ブーアスティンの『幻影の時代――マスコミが製造する事実』も現れ、広告戦略、情報化時代のもつ新しい問題に光があてられる。

ここでのポイントは、これらがわずかに連動しつつ、でも基本的には独立してそれぞれの分野での考察を通じ、一つの新しい時代の到来をこれまでにない近代の次元の出現として語っているという点である。いずれもが他人志向、消費と情報の前景化、大衆社会化、生活水準の上昇といった変化とともに生じる「新しい近代」の到来を告げている。どの論でも、大きくいえば自然を開拓、開発する生産中心の前期近代から流通、通信、サーヴィスなど都市における洗練された知的業種へと軸足を移した消費中心の後期近代へと近代が「離陸」しつつあるという観察を示している。「離陸」という言葉を有名にしたW・W・ロストウの『経済成長の諸段階――一つの非共産主義宣言』も同じ時期、六〇年に出ている。近代はその成長の果てで、ようやく貧困と工業化という前期近代の大地から離脱し、ささえをもたない豊かさと消費と情報の世界へと入る。そして新しい問題に出会うというのである。

しかし、これらの動きを近代二分論というカテゴリーのなかにおいてみると、このとき同時にやはり米国で、もう一つの流れが生じていることに気づく。ガルブレイスの『ゆたかな社会』から四年後、ブーアスティンの『幻影の時代』と同年の六二年に、まず抜粋の形で「ニューヨーカー」に掲載され、その後単行本化されるやたちまちベストセラーとなるレイチェル・カーソンの『沈黙の春』が、それである。ベルは『脱工業社会の到来』に「脱工業社会という概念」をはじめて提唱したのは一九六二年に開かれたある「技術と社会的変化に関する討論会」の席上においてであったと述べているが、カーソンはそれと同じ年、こちらは化学薬品、農薬等による環境破壊問題をとりあげ、経済の成長の結果、自然破壊という新しい問題が生まれてきていることに警鐘を鳴らす。両者はともに「新しい近代」の段階の到来を告げている。このあと永続的に近代社会が成長し、変容するであろうという先の開放系の近代二分論が新しい展開をみせるのとほぼ同時期に、同じ米国に、このままでは未来に問題を生じると説くいわば閉塞系の近代二分論が登場してくるのである。

また、ヨーロッパに目を移せば、この五〇年代、六〇年代の米国の動きと踵を接するようにして、やはり六〇年代から七〇年代にかけ、この二種の近代二分論の流れが、それぞれにさらに新しい展開を見せている。

一九六〇年代から七〇年代にかけ、フランスに起こる新しい近代二分論、その後、ポストモダン思想として世界を席巻することになる広範な思想動向が、そのうち、開放系の近代二分論の後身である。そのつながりは、同じ社会学の領域でさらに斬新な消費社会論を展開する七〇年のジャン・ボードリヤールの『消費社会の神話と構造』に顕著で、ボードリヤ

ールはリースマン、ブーアスティンの著作に言及しつつ、ガルブレイスの『ゆたかな社会』に照準をおき、そこに示された認識からの展開を記号としてのモノの消費を中心とした新しい消費社会論として示す。このフランスでの近代二分論は、より哲学的な広がりを示し、源流をたどれば前世紀初頭のソシュール言語学、近いところでもクロード・レヴィ＝ストロースの『悲しき熱帯』（一九五五年）、さらに六二年の『野生の思考』の文化人類学的知見にまで遡る。レヴィ＝ストロースはこの後者の著作でサルトルとの間に論争をかわし、構造主義の考え方を世に広める。そして、六六年にミシエル・フーコーの『言葉と物』が世に現れると構造主義、ポスト構造主義の思想革新が起こり、この動きは大規模な地殻変動をともない、思想全域に広まる。

そこでは、マルクス主義批判、実存主義批判を基礎に、大きく、「大きな物語から差異の戯れへ」、「主体から構造へ」、「生産から消費へ」、「実体からシミュラークルへ（リアルからヴァーチャルへ）」といった考え方の転換が示され、そこに底流する社会の変化が語られる。ここから、七二年のドゥルーズ・ガタリの『アンチ・オイディプス』などの関係欲望論をへて、七九年、ジャン＝フランソワ・リオタールが『ポスト・モダンの条件』を書き、ここに記したような近代二分論としてのポストモダン思想の輪郭を、改めて「知」の意味の更新として語り直す。この先、ジャン・ボードリヤールのシミュラークル論、情報社会論、ジル・ドゥルーズの差異の理論、ジャック・デリダのエクリチュール論、脱構築論などが現れるが、この流れも大きく見れば、この近代二分論の枠組みに内属するのである。

他方、これに並行してヨーロッパ、アメリカを横断するかたちでもう一つの近代二分論が浮上してくる。七二年、ローマ・クラブが『成長の限界』を刊行することによってやはり世界に広く働きかけるようになる地球の有限性の論である。

これは、『沈黙の春』の延長上で、地球の環境、資源、人口爆発をささえる食糧の供給にはっきりとした限界のあることを示し、やはり近代の第一原理である産業の成長がこのまま続けば、早晩、人類は危機を迎えるだろう、したがって、どこかで考え方を変えなければならないと説く。

閉塞系の近代二分論としての新展開である。

ポストモダン思想が哲学社会思想の領域で世界を席巻していく時期と、「成長の限界」の持続的社会にむけたエコロジー論ともいうべきものが世界中に広まっていく時期とが重なっていることが、ここでの観点からは注意をひく。『沈黙の春』のショッキングな警告から一〇年後に現れた「人類の危機」に関する総合的リポートは、方法論としては、ベルが『脱工業社会の到来』の中で述べた「システム分析」をコンピュータの世界モデルを用いて全面的に展開した将来予測となっている。この点での両者の共通性が指摘できるのだが、当時として斬新なコンピュータ予測に基づくこのシステム分析は、そのショッキングな内容もあって世界に広範な影響を及ぼす。この後、多くの国に環境保全のための省庁、機関が作られる。国際機関もこれに鋭敏に反応する。八四年からは

米国のワールドウオッチ研究所から『地球白書』が毎年刊行されるようになり、九二年には、リオ・デ・ジャネイロで国連の「地球サミット」が、九七年には、京都で地球温暖化防止会議（COP3、京都会議）が開かれる。こうして八〇年代から九〇年代にかけての時期は、「北」の世界を一つはポストモダン思想が、もう一つは社会の持続的な発展とエコロジーの思想が、広く覆っていく。

こう見てくると、一つのことがわかる。二つの近代二分論が同時期に生れ、併走し続ける。両者はなんら相手方には関心を示さない。完全な没交渉が現れ、やがて両者を征圧していくという興味深い事実である。

6　ポストモダンか、成長の限界か

一九五〇年代から六〇年代にかけて米国に現れた新社会論の著者たちの多くは、社会学と経済学の専門家たちであり、この時期、未曾有の繁栄を迎えつつあった新しい社会の地平に目を奪われている。そのため、このあとレイチェル・カーソンの『沈黙の春』やローマ・クラブの『成長の限界』によって語られる地球の有限性への関心がそこに見られないからといって、さほど異とするに足りない。たとえば、『沈黙の春』の四年前に刊行された『ゆたかな社会』のガルブレイスは、米国経済における民間部門支出に対する公共部門支出の低さにふれ、市民が田舎にピクニックに行くと「広告のために景色もみえ」ず「美学的な考慮は二の次」となっていることやキャンピングカーの宿泊地の公園が「公衆衛生と公衆道徳をおびやかすようなしろもの」であることにふれているが、そこで環境問題とされているのは景観、公衆衛生、公衆道徳の問題である。環境破壊への関心はほぼ見られない。

しかし、四〇年後、九八年に書かれた決定版によせた序文で初版のこのくだりをそのまま引用し、これを「環境」問題と呼びながら彼がなおその後の「環境」問題の変化になんらふれないでいるのを見ると、やや奇異の感をおぼえる。この経済学の泰斗の『ゆたかな社会』の文脈における地球の有限性問題への無関心ぶりと楽天性に、二つの近代二分論の間の懸隔の意外な大きさを知らされる思いがするのである。

同じことは七三年、『成長の限界』の翌年に出るダニエル・ベルの『脱工業社会の到来』についてもいえる。そこでのベルの論点には「脱工業化」、「サーヴィス部門」の興隆など数多く地球の資源、環境の有限性への対処につながる要件が含まれているのだが、やはり『沈黙の春』から『成長の限界』へといたるこの地球の有限性問題との関わり、議論のすり合わせへの関心は見られないからだ。

この種の無関心と没交渉が、この後も二つの近代二分論の間に続く。

その理由をどこに求めるのがよいだろうか。

先に述べたように二つの近代二分論に接点がないとは思われない。両者は同じ時期の同じ原因からなる社会の変化を問題にしているからである。たとえば、ボードリヤールの『消費社会の神話と構造』には、

これまでのすべての社会は、いつでも絶対的必要の限界を超えて、浪費と濫費と支出と消費を行ってきたが、それは次のような単純な理由によるものだ。つまり、個人にせよ社会にせよ、ただ生きながらえるだけでなく、本当に生きていると感じられるのは、過剰や余分を消費することができるからなのである。（三九頁）

という指摘があり、これは私にはとりわけ『成長の限界』の論理に対する重大な挑戦を意味する論点と思われる。けれども、ポストモダン思想の担い手が真摯に地球の有限性の問題に取り組んだという話もきかなければ、『成長の限界』の書き手たちがこの論に反応したという事実もない。『消費社会の神話と構造』には、さらに「豊かさ、つまり常に増加する個人的および集団的財と設備の発展は、その代償として常に深刻化する『公害』を招くことになった」と「公害」への言及もあるのだが、そこでの「浪費と濫費と支出と消費」は、この指摘以上には「成長の限界」の論理とまじわらない。資源の「浪費と濫費」に警鐘をならす地球の有限性の論理に対して、たとえば「過剰や余分」の消費によって「本当に生きていると感じられ」ないのなら生きていてもしかたないではないか、とボードリヤールが冷笑、反駁を加えないという以前に、その「対立」への引照がなく、したがって両者が対立関係におかれるということ自体が「ない」のである。「公害」の一分肢としての「自動車の氾濫」について、ボードリヤールはいう。

自動車の氾濫は巨大な技術的・心理的・人的欠損をもたらした。だが、それはどうでもよい。というのは、必要な過剰設備投資やガソリンの追加消費や交通事故に会った人びとの治療費などは、帳簿上はすべて消費として記録され、国民総生産と諸統計に組みこまれて、経済成長と富の指数となるだろうからである。（三二～三三頁、傍点引用者）

「公害」は、彼の消費社会論の視野のうちにあることはあるのだが、それが人間の生活に「欠損」をもたらす側面は「どうでもよい」。それは、消費社会と正面から衝突する「成長の限界」の要因としてではなく、むしろ公害ですら消費社会に吸収されていくという逆説の引例としてボードリヤールの論に位置を占める。ボードリヤールにとって、「公害、それは一方では産業の発達と技術の進歩の結果であり、他方では消費の構造そのものの結果でもある」。「公害」は「成長の限界」の指標であるかもしれないが、また新しい社会における「消費」概念の広がりの指標でもある。そして彼の関心は、もっぱら後者の意味あいに注がれている。

これはボードリヤールに限られたことではない。こういうしぐさがポストモダン思想の特徴なのだ。この間のフランスの思想的な地殻変動をポストモダンという近代二分論の概念でくくるリオタールの『ポスト・モダンの条件』では、冒頭、「知識」が人に使えるもの（操作的であるもの）、人に通じるもの（共約的であるもの）として現れるときには、そこ

にほんらいひそむ、通じにくいもの（共約不可能なもの）への「テロル（殺戮）」が行われているのだと述べられている（一〇～一一頁）。「成長の限界」の論理といえば「操作的」で「共約的」である点最たるものの一つである。むろんそこでは微細なものなど四捨五入されている。でもそこに提起されているのが現代世界に無視しえない問題である場合、この「操作」され「共約」され、粗雑だがかつ重大だという問題提起の「知」と、どうつきあうか。これが、実はポストモダン思想にとっての死活的問題であろうのに、ここでは話はその方向に進まない。この本でまず説かれるのは、こうした大ざっぱな「物語」に対する警戒の呼びかけであり、リオタールは共約不可能なものへの繊細な寄り添いを敢行する一方、そうした選択が当然孕むだろうもう一つの問題には無関心で鈍感なままなのである。

したがって、前期近代から後期近代への変化の指標はたとえていえば愛による原罪からの解放という（キリスト教の）物語、学問による無知・隷属からの解放という（啓蒙の）物語、労働の揚棄による搾取・疎外からの解放という（マルクス主義の）物語、産業の発展による貧困からの解放という（資本主義の）物語など、さまざまな「解放」の「大きな物語」の〝終焉〟として語られる。その結果、たとえば「産業の発展による貧困からの解放」という「資本主義の物語」は、でもそこにはなお目に見えない、別個の「貧困」が生き延びていると指摘され、その「解放」の「物語」の大ざっぱさ、粗雑さがえぐりだされはするものの、他方、「貧困」は（一定程度）克服されたが、今度は地球の有限性という新たな問題にぶつかるようになったというようには、語られない。それだと、「大きな物語」から「差異の戯れ」ないし「小さな物語」へとはならない。「大きな物語」（貧困からの解放）からもう一つの「大きな物語」（成長からの離脱）へとなり、共約不可能なものの殺戮を結果してしまうだろう。

ポストモダニズムはこのように、そもそも考えを同じくする者以外とは率直に対話を行えないという、奇妙な不能性を抱え込んでいるのである。

これと同じことが、もう一つの流れである『沈黙の春』における環境破壊への警告、『成長の限界』の地球の有限性の論理についてもいえる。ボードリヤールの消費社会論が「公害」の問題性を把握しながら、不思議なかたちでこれを「壁抜け」してしまうように、レイチェル・カーソンの化学薬品の公害告発にも、消費社会、また「産業の発展」への想像力、あるいは奇妙な言い方に聞こえるかもしれないが近代を創設してきた「人間」への同情心ともいうべきものが、欠けている。

『沈黙の春』にはこのようなくだりがある。

この地上に生命が誕生して以来、生命と環境という二つのものが、たがいに力を及ぼしあいながら、生命の歴史を織りなしてきた。といっても、たいてい環境のほうが、植物、動物の形態や習性をつくりあげてきた。地球が誕生してから過ぎ去った時の流れを見渡しても、生物が環境を変えるという逆の力は、ごく小さなものにすぎない。だが、二十世紀というわずかのあいだに、人間という一族が、おそるべき力を手に入れて、自然を変えようとしている。

（一四頁）

ここには環境と生命の関係の逆転に関する的確な見方が生き生きと述べられている一方、なぜ「人間という一族が、おそるべき力を手に入れて、自然を変えようとして」きたかについての想像力、哀れな「人間という一族」への同情心が見られない。人間が「自然を変え」る力を手に入れ、それを行使するようになったのはそう昔のことではない。それによって人類ははじめて古代以来続いてきた生存の最低ラインからの離陸を可能にした。それまでは一握りの人間にしか可能でなかった。しかし以後、それが広範な民衆の手に渡る。それは「自然」の開発、破壊という観点からみれば「おそるべき力」だが、人間の自由と幸福という観点からみれば、「よき力」なのである。

この「よき力」が行き過ぎた結果、環境破壊が起こっている。問題は、「行き過ぎ」を押さえ、これが産業社会の根幹からくるのであればその根幹を見直すことなのだが、こうしたいわば複眼的な思考と二枚腰の姿勢が欠けているため、近代は否定の対象にしかなっていない。ここにあるのは公害に苦しむ三代目と工場建設に立ち向かう一代目の関係である。前者がいまここにいるのは、後者がそこを切り開いたからで、そこには原因と結果、恩恵と被害というだけでなく、富とその帰結という順接の関係もある。

つまりここにも一つの利害の相反、論理の対立、考え方の衝突する場面があるのだが、ポストモダニズムの場合と同様、レイチェル・カーソンの論理もまたこの場面で「開発の論理」には冷淡な否定に終始し、ありうべき難問を取りだす方向には向かわないのである。

いや、これはむしろこういったほうがよいかもしれない。レイチェル・カーソンが『沈黙の春』を書いたとき、産業の発展は自明のものだった。誰もがその活力の無限性を信じることができた。だから、それがもつ「行き過ぎ」の作用を心おきなく否定することができた。でも半世紀たち、この毒がとうとう自然の劣化を通じて産業自体にまで回ってきて、いまや産業と経済成長自体を圧迫している。産業社会自体がそのため危機的状況に陥っている。だから、私たちの目にいま『沈黙の春』の論理は、「産業の論理」への反逆でありつつ、逆に産業への依存とも見えてしまうのだ、と。

そもそもなぜ環境破壊はよくないのか。それは人間の幸福に反するからだろう。たとえどんなに極端な環境保護論者であろうと環境を守るために人類は滅ぶべきだとまでいわないのは、そのためである。つまりそこにあるのは、環境の保護、自然との共生が人間にとっての幸せにつながるという、人間中心の、幸福をめざす考え方なのである。

『沈黙の春』は環境破壊を告発する著作のなかでももっともすぐれたものの一つである。そういう本を相手にこうした揚げ足とりめいたことを記すのは心苦しいが、それというの

も、これがきわめて重要なことだからだ。ここにある「生産」と「成長」に対する冷淡な無関心が、その後「成長の限界」の論理の特徴ないし痼疾へと育っていく。この一面性が彼らの論理をきわめて脆弱なものにするのである。

そもそも、なぜ、地球の資源、環境に限界があることは自明なのに、経済成長のあり方に反省を加え、これをより穏当で妥当なもの――持続可能なあり方――に変えようと努力する人が、少数のままにとどまっているのだろうか。

なぜ「成長の限界」の論理は、広範な、世の大多数の人々を動かすことができないまま、現在にいたっているのだろうか。

またなぜ、このままゆけば地球が危機に瀕すると警告されたおりにはショックを受け、何とかしなければと考えたのに、いつの間にか私たちの多くのなかで、この危機感は、馴致され、手なずけられてしまうのだろうか。

このような問いが出てくる。

というか、――いまなら持続的成長の確立のための、といわれるだろう――「成長の限界」の論理の問題点は、ここにある、というべきなのではないだろうか。

この思いは彼らがこの問題をどう考えているのかを見るとき、さらに強まる。

七二年に出た『成長の限界』は、著者たちの結論を、このように要約している。

（一）人口、工業化、汚染、食糧、資源枯渇の趨勢がいまのまま進行すれば近い将来地球上の成長は限界に達する。そこから起こりうるのは人口と工業力の「かなり突然の、制御不可能な減少」である。

（二）しかしこの趨勢を変更すれば持続可能な均衡状態を作り上げることは可能である。

（三）その変更に向けての努力は早ければ早いほどよい。

そして、冒頭、この種の提言はこれがはじめてではないことにふれ、こうした人間社会の将来の進路に関する問題が重要であることを「信じている人は多い。それにもかかわらず、これらの問題を理解し、その解決策を求めることに積極的に関心を払っているのは世界の人口のごく一部の人々にしかすぎない」と述べている。

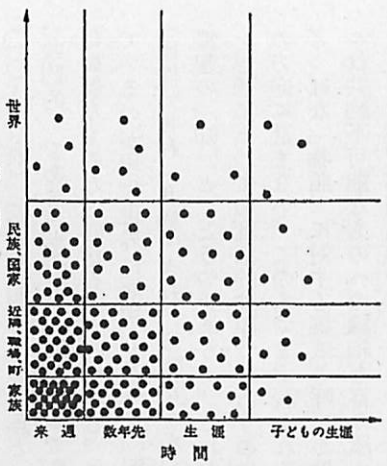
なぜだろう。

この問題に説明を与えるべく、彼らが掲げるのは次のような「人間の視野」と題された興味深いグラフである。

人間はさまざまな関心をもって生きている。どんな人も「それぞれ注意と行動を必要とする一連の関心事と問題をかかえている」。ある人は明日の食糧を自分と家族のために見つけようと多くの時間を費やしているかもしれないし、ある人は選挙とか近隣の国との国境問題とかに頭を悩ましているかもしれない。そうしたさまざまな人々のさまざまな関心のありようを、こうグラフ化できるというのである（図を参照）。

図には縦軸に空間が狭い方から広い方へ、家族、近隣・職場・町、民族・国家、世界と四区分されている。横軸には時間がやはり、ごく近い将来から遠い未来へと来週、数年先、

生涯、子どもの生涯と四区分されている。著者らの考えでは「ほとんどの人々の関心はグラフの左下方に集中している」。とりわけ生活に追われているような人々がそうだ。しかしそうでなくとも人は、余裕がないと、「来週」の自分を含めた「家族」のことを心配するのに精一杯で、とても他のことには頭が回らない。それよりも余裕ある人々の場合でも、まず身近なことがらから問題を処理することが第一で、それがすむと少し関心を広げ、順次「数年先」の自分の「国家」の行く末へと射程を伸ばしていく。したがって、「一般に、問題の空間的な広がりが大きいほど、また時間的な広がりが長いほど、その問題の解決にほんとうに関心をもつ人の数は少なくなる」。その結果、グラフの右上方、「子どもの生涯」に関



人々の視野は空間的にも時間的にも異なるが，すべての人間の関心は，上掲の空間=時間グラフのどこかにあてはまるはずである。大多数の人々の関心は，家族や友人に対する短期的なことがらに限られている。他の人々は，時間的にもっと先まで見通し，町とか国といったもっと広い範囲のことがらに関心をもっている。ごく少数の人々だけが，遠い未来に広がる全世界的な関心をいだいている。

図1　人間の視野

『成長の限界』（ダイヤモンド社、一九七二年）より

わる「世界」の運命で現されているローマ・クラブの関心領域に位置する人々の数は少ない。他方、グラフの左下方、身近な時間と空間のなかにあって「来週」の「家族」の心配で頭がいっぱいの人の数は、圧倒的に多い。

この図がすべてで五〇を超える際だった『成長の限界』の図表群のなかで、図1と銘打たれ、最初におかれているのは偶然ではない。そう明言こそされていないものの、これが、世の多くの人がいくら一〇〇年後の「世界」が破綻の危機に瀕していると言われても無関心でいることに対する――彼らの最大の懸念に対する――、著者らの考えつくメインの理由の説明なのである。

著者らが、この問題を深く考え、執筆していることは、全編を通じての論立てからも窺われる。第四章の「技術と成長の限界」には、

近代の歴史はかくもうち続く成功をおさめてきたので、技術的な突破によって、自然の限界を無限に克服し続けることができると多くの人々が期待をいだいているのも当然である。（一一一頁）

という断りがある。彼らは、このやみくもな技術信仰が彼らの警告に対する最大の敵の一つであると見定め、「技術」はほんとうに彼らの予測する文明の崩壊を食いとめることができるかどうか、一章をあてて丁寧に検討している。

しかし、『成長の限界』の近代二分論としての性格を吟味

しているここでの狙いからいえば、まず技術の可能性の検討自体をも基礎づけている「人間の視野」のグラフ作成に現れている著者らの人間観、近代観が、問題になる。

すると、ほんとうにこれでよいのだろうか、という疑問が浮かんでくる。それは、ここにも『沈黙の春』に見られたのと同様の、「半面」だけの近代理解、「当為」のみに立脚した人間理解の傾向が顕著だからである。

こう考えてみよう。左下方の人々は、ではなぜ、「来週」の「家族」の心配で頭をいっぱいにしているのだろうか。これらの人々の「来週」の「家族」の心配と、ローマ・クラブの賢人たちによる「子ども」の生きる一〇〇年後の「世界」への心配と、そもそも軽重がつけられるのだろうか、と。著者らによればこの世には、目前の身近なことに関心をもつ多くの人々と、将来の世界の運命に関心をいだく少数の人々がいる。彼らは前者の心配よりも後者の心配のほうが重要だと考えている。一〇〇年後の「世界」の心配は、人類全体の存亡に関わる。これに対し、「来週」の「家族」の心配は、その家族だけのささいな、具体的な心配ごとにすぎないからだ。でも、左下方の人々はなぜ直近の家族のことを心配しているのだろうか。不安だからだ。ではなぜ不安なのか。そもそも家族の一人一人の幸福を、その人が願っているからだろう。その幸福は世界の運命に比べれば小さい。しかし、圧倒的な人々が、左下方にあって、小さな家族の幸福を願うばかりに、ささいな心配に頭を悩ませている。この世界は、小さな心配に頭を悩ませる圧倒的多数の人々と、圧倒的に大きな心配に心を向ける少数の人々とからなっているのである。

ところで、このことは、圧倒的多数の人々の小さな心配と、少数の人々の圧倒的に大きな心配とは、実は、それらがともに人間の幸福への願いから生じているのだと考えてみるなら、等価であることを語っているのではないだろうか。というか、等価であると考えるべきであることを、示唆しているのではないだろうか。

『成長の限界』の分析はシステム分析としてはすぐれているが、十分な人間理解、また近代理解に伴われていないのではないかという疑問が、ここから出てくる。

十分でないのは、このまま行くと人類が危機に瀕する、だから一刻も早くそれに対処しなければならない、という彼らの人々への訴えが、この人類の危機という大問題に比べれば、多くの人の小さな心配ごとなどなにほどのこともない、という——冷たい、また浅い——人間観に裏打ちされているからである。そこに欠けているのは何か。

——人は何のために生きるのか。そういう問いである。

サタンがイエスに「石をパンに変えてみよ、そうすれば誰もがその奇跡に驚いてお前に従うであろう」というと、イエスがこれに「人はパンのみにて生くるにあらず」と答える。人はパンのみで生きているのではない。しかし、パンがなければ生きていけない。この二つの条件のあいだに、人は何のために生きるのか、という古くて新しい問いがあるのだが、著者たちは、このことに思いいたっていない。このまま成長を続ければ、「パンがなくなる」、それ以上に大事なことがあるか、さあ、心ある人は、そのことを真っ先に考えよ。彼らは、そういっているに等しい。

しかし、「人はパンのみにて」は生きられないのではないだろうか。幸福への希望、また自由、欲望とともにでなければ、生きていけないのではないだろうか。

そしてそれに対し、ポストモダニストたちが、人間は「ただ生きながらえる」というだけでは生きていけない。人が「本当に生きていると感じられるのは、過剰や余分を消費することができるからなの」だと、こちらはこのままいくと「パンがなくなる」ことには無頓着に、嘯いているというのが、ここまで見てきたポストモダニストと「成長の限界」論者のあいだの没交渉の図だった。

『成長の限界』から二〇年後に刊行された第二版にあたる『限界を超えて—生きるための選択』では、著者らの考えは、一歩を進め、こう述べられている。

いまや二〇年前に警告した「成長の限界」のいくつかは「超え」られてしまった。「崩壊」はさまざまなかたちではじまっている。状況はいよいよ逼迫している。しかしまだ、この「行き過ぎ（overshoot）」から引き返すことは可能だ。「われわれは全世界が持続可能な社会への道を選択することを望んでやまない」。とはいえ、「その選択の重大さと難しさを見くびるつもりはない」。なぜなら、

技術的、経済的には、持続可能な社会への移行は可能であるし、さほど難しいことでもないと信じている。だが、心理的、政治的には、人びとに二の足を踏ませるような選択であることも承知している。それは、あまりに多くの希望が、あまりに多くの人びとのアイデンティティが、そして工業化された現代文化の多くが、果てしなく続く物質的成長という前提の上に築かれているからだ。（ix頁）

ここで彼らは、いわば左下方の人々がなぜ「明日」の「自分」あるいは「家族」の心配で頭がいっぱいになっているのか、その理由を一歩踏み込んで理解しようとしている。そう、これらの人々は、第一版で考えられたように、たとえば貧しいために、「明日」と「自分」への関心から離れられないのではない。もうどうでもよいと自暴自棄なら、「明日」だって心配しない。生きることに「希望」をもっているからこそ、彼らは「明日」の「自分」あるいは「家族」のことに頭を悩ますのである。

だから、問題は、圧倒的多数の人が身近な心配に忙殺され、地球の運命を考えない——という嘆かわしい状態にある——ことではなく、圧倒的多数の人々の「希望」と「アイデンティティ」が、「物質的成長という前提の上に築かれている」ことである。では、どうであれば、たとえ「物質的成長」を「持続可能な成長」へと変えた場合でも、人々の「希望」と「アイデンティティ」は生き延びるのか。これらがさして「物質的成長を伴わない」「持続可能な成長」のうえに、築かれるということは、どのように可能か。

問いがそのように立てられているのではない。しかし、第

二版の『限界を超えて―生きるための選択』では、人々の「希望」と「アイデンティティ」――とそこで呼ばれているもの――がなければ、人々は動かないと、考えられている。

ここになお欠けているのは、そういう「幸福」への「希望」の展望が示されなければどんな人々も動くはずがないという、基本的な人間観の徹底である。しかし、こう見てくれば――ここまでくれば――、開放系、閉塞系、二つの近代二分論がそれぞれ自らのうちにひそむ弱点ゆえに相手との生き生きとした交渉へと進めず、この世界が必要としているありうべき問いまでたどり着けないできた経緯が、私たちの前に見えてくる。

たとえば、『ゆたかな社会』のエピグラフには、こう書かれている。

> 経済学者は、他のすべての人と同様に、人間の究極の目的を関心事としなければならない。
>
> アルフレッド・マーシャル

その著作の趣旨からいって、ここにいう「人間の究極の目的」とは「ゆたかさ」をもその内容の一つとする「幸福」ということ、「自由」ということ、また「希望」ということだろう。人間は何のために生きるのか。『ゆたかな社会』はようやくわれわれは「人はパンのみにて生くるにあらず」を前提に経済学を再調整すべき段階まで達したと述べる。そしてボードリヤールはそこに、人は「必要」のためには「ただ生きながらえる」ことしかできない、「本当に生きていると感じられる」には、「過剰や余分を消費」しなければならない、ともう一つの項をつけ加えるのである。

では、どのようにすれば、地球の有限性のもとで、人は「自由」を実現し、「幸福」をもとめて、「本当に生きていると感じられる」生活を送ることができるのか。

この希望のうちに顔を出しているのは、そもそもどういう問題なのだろうか。

ここまできて、私は三・一一の経験の場所に戻ることができる。原発事故からの一年半の思索は私に一つの本の意義を再認識させた。見田宗介の一九九六年の著作、『現代社会の理論』である。

7　全体理論の必要

日本では、ここまで述べてきた二つの流れは、次のような展開を示した。まず米国流の「新しい社会論」がダニエル・ベルの系統で数年のずれをもって移入され、村上泰亮が七五年に『産業社会の病理』を、また八四年に『新中間大衆の時代』を書き、同じ八四年に山崎正和が「消費社会の美学」の副題をもつ『柔らかい個人主義の誕生』を著す。他方、フランスのポストモダン思想、ポスト構造主義の系統で、蓮實重彦が七九年に『表層批評宣言』、八五年に『物語批判序説』を書き、柄谷行人が七八年に『マルクス　その可能性の中心』、七九年に『隠喩としての建築』、八〇年に『日本近代文学の起源』を著し、新しい批評スタイルに道を開く。ついで八三年にはフランスの現代思想を解説する浅田彰の『構造と力』がベストセラーとなって、新しい時代の到来を印象づける。このうち蓮實は、「深層から表層へ」、「大きな物語から差異の戯れへ」という消費社会の謳歌の方向を示し、柄谷は、これまでの「大きな物語」、マルクス主義、近代文学といった概念の解体作業をへて、外部、交通、他者等の観点を打ち出す。

また、それらとは一線を隔てた場所で、吉本隆明が独自の観点から八〇年代から九〇年代にかけてやはりこれまでと異なる消費社会論、情報社会論を展開する。吉本の思想については場所を改めて考えるが、八四年、『マス・イメージ論』で「情況から現在へ」というポストモダン思想に併行する軸足の移動が示され、その試みは以後、超近代と呼ばれる高度消費社会と高度情報社会の行く末の探究へと向かうようになる（『ハイ・イメージ論』一九八九年～九四年）。

一方、『沈黙の春』、『成長の限界』の流れは、どうなったか。日本では水銀汚染公害である水俣病のチッソ告発運動などを中心に、独自に公害研究、環境問題研究の分野で考えが深められる。以後、経済学者玉野井芳郎の一九七八年の『エコノミーとエコロジー』など注目すべき仕事も現れ、八三年にはエントロピー学会なども作られるが、八五年の玉野井の急逝などから、大きな流れを形成するにはいたらない。そして、八九年ベルリンの壁が崩れ、九一年ソ連が崩壊すると、先のボードリヤール、リオタールに代表されるポストモダン思想の「生産から消費へ」の論、価値相対化の流れが――既成の「大きな物語」を洒脱に批判する一方で自らはなんら新しい指針を提示できないという――先にふれたアイロニカルな「不能性」の問題に正面からぶつかり、そして今度は倫理先行のポストコロニアリズム、カルチュラル・スタディーズへと転じ、新たにその日本への移入型を通じ、ここに合流してくる。こちらは、ポストモダンの思想をひきつぐ一方、新たに南に立脚し、資本主義と北の「ゆたかな社会」の「悪」を糾弾する新しいスタイルをとる。「北」の消費社会は、こうして従来からの反公害、エコロジー主義の流れと新しい反国家、反資本のポストコロニアリズムの流れと、二様の批判にさらされるようになる。『成長の限界』の論理は、日本の場合、「北」の「ゆたかな社会」への批判という色合いを一段と強め、進展をとげる。

このとき、先に述べたポストモダン思想の近代二分論が、どのような壁につきあたり、方向を転換することになるかについては、先にふれたように、柄谷行人が、ポストモダン論者のなかにあって例外的に率直に、こう述べている。

> 一九八九年に至るまで、私は未来の理念を軽蔑していた。資本と国家への闘争は、未来の理念なしにも可能であり、現実に生じる矛盾に即してそれをエンドレスに続けるほかない、と考えていた。しかし、八九年以後に私は変わった。それまで、私は旧来のマルクス主義的政党や国家に批判的であったが、その批判は、彼らが強固に存在し続けるだろうということを前提していた。彼らが存続するかぎ

り、たんに否定的であるだけで、何かをやったような気になれたのである。彼らが崩壊したとき、私は自身が逆説的に彼らに依存していたことに気づいた。私は何か積極的なことをいわなければならないと感じ始めた。私がカントについて考え始めたのは、本当はそのときからである。(『トランスクリティーク』序文、傍点引用者)

八九年から九一年までの二年間で、無意識のうちにいつまでも――無限に――「強固に存在し続けるだろう」と思っていたソ連と東欧の共産主義国家群があっけなく崩壊してしまう。そのとき、自分のポストモダンふうな「未来の理念」への軽蔑と批判が、それじたい「未来の理念」への依存に支えられていることに気づいたと、柄谷は述べている。私がその後の柄谷の思想的試みを、その内容については賛成できないながらも思想のあり方として高く評価するのは、この率直さゆえである。

寡聞にして私はこのような例を柄谷以外にはしらないのだが、気づいてみれば、いまなお社会的な関与にアイロニカルな距離を保ち続ける蓮實重彦などを例外に、いまや多くのポストモダニストたちが「南」を代弁して「北」の「ゆたかな社会」を批判する、あるいは日本の「天皇制」を告発するポストコロニアリズムの論者になりかわっている。彼らは反国民国家主義者であり、反資本の立場であり、彼らにおいて起こったことも柄谷の場合とそれほどは違っていない。ただ柄谷ほど正直でない分、彼らの転進は柄谷ほどには先鋭的でない。

ポストモダン思想はこうして「大きな物語」に不信をつきつける価値相対化の運動から、「他者」と「正義」と「贈与」をキー・コンセプトとし「南」を足場に「北」の「ゆたかな社会」を告発する倫理的なポストコロニアリズム、カルチュラル・スタディーズへと姿勢を変える。先に「大きな物語」への不信を語ったときには、ポストモダニストたる彼らに「ゆたかな社会」に対する素朴すぎる告発は禁じ手となっていて不可能だった。しかし今度「南」の搾取される人々を代弁し、「北」を告発するようになるとポストコロニアリストたる彼らに「ゆたかな社会」への理解が影をひそめるようになる。誰ももはや人間が「本当に生きていると感じられるのは、過剰や余分を消費する」ときなのだ、というようなボードリヤール流の言葉は吐かない。彼らの論理は、先の開放系の近代二分論から今度は閉塞系の近代二分論へと移るのだが、それはなめらかすぎる横滑りで、そこにあった問題点は再びスルーされている。

そこに欠けているのは何か。

九六年、初の全体理論、見田宗介の『現代社会の理論』がその問いに答えるものとして現れてくる。

(この項つづく)